

大洋州で地に足の着いた成長を後押ししたい



パプアニューギニア
事務所

堀越 大輔

HORIKOSHI Daisuke

大学院修了後、一般財団法人日本国際協力システムに就職。2012年にJICAに転職。東南アジア・大洋州部を経て、2014年10月より現職。

津波災害や紛争後の復興支援などに携わってきた経験を生かし、JICAで働く堀越大輔さん。現在、急成長を遂げる大洋州のパプアニューギニアの発展を、地に足の着いたものにするべく奮闘している。

「国際協力を一生の仕事に」 現場での経験で固めた覚悟

大学時代、アジアなどを旅行したのをきっかけに、日本とは異なる文化や価値観に触れる面白さを知りました。もっと深く世界を知りたいと文化人類学が学べる大学院へ。当時、アジア経済危機から復活しつつあったマレーシアの経済発展と文化の相互関係について調べるため、現地に数カ月滞在したこともありました。

卒業後は、一般財団法人日本国際協力システム（JICS）に就職。当時は、スマトラ沖大地震・インド洋津波が起きた直後の支援活動に追われ、社内は猫の手も借りたい状況。国際協力の仕事に関する具体的なイメージもないまま、すぐにインドネシアの首都ジャカルタに派遣され、復興に向けたインフラ整備に携わりました。週末も休まず働く先輩たちに必死で付いて行く日々は大変でしたが、同時にやりがいもありました。開発途上国の国づくりの現場に身を置き、やはり国際協力は一生の仕事だと実感。より知見を高めたいと考え、アメリカの公共政策大学院に進みました。

より幅広い 国際協力に携わりたい

これまで以上に幅広く、多様な支援事業に挑戦したいとの思いがあり、帰国後しばらく

してJICAに転職しました。

最初に配属された東南アジア・大洋州部では、大洋州諸国や東ティモールの担当になりました。実施中の事業を取りまとめながら、次の協力の方向性を決めることが私の役割。それまでは特定のプロジェクトに深く関わる仕事でしたが、JICAの在外事務所や関係部署、外務省、他国の援助機関、民間企業などさまざまな組織との調整役を担い、最初は戸惑いもありましたが、新鮮でした。

他国の援助機関と連携し、 協力の効果を高める

現在、赴任しているパプアニューギニアは大洋州最大の国土と人口を有し、豊富な資源収入に支えられ急成長を遂げている国です。日本の支援もここ数年増加しており、経済成長基盤の強化、社会サービスの向上、環境分野の改善に重きを置いています。同時に、他国による支援、資源開発に伴う民間企業の進出も急速に増加しているのが現状で、他の大洋州の国と比べると特殊な面も多くあります。

そんな中、日本の強みは、現地の政府担当者や他の援助機関との距離が近いこと。例えば、私が担当している運輸交通分野では、定期的に現地政府も含めたドナーミーティングが行われ、急激な経済成長をしつつありと地に足の着いたものにしていくように



港湾の政策や行政能力を強化するプロジェクトの会議で現地の関係者と協議

歩調を合わせる取り組みが行われています。オーストラリア政府の方からは、「お互い補いながらやっていきましょう」と赴任時に温かく迎えていただきました。彼らと接する中で、現場レベルでの地に足の着いた援助協調の重要性を再認識しているところです。

学生時代に学んだ文化人類学の観点から、画一的な経済発展に対する疑念や不安を感じることがあります。大洋州諸国は、数字的には自立していない。国が多いかもしれませんが、貧しい家庭の子どもを近所の家族が引き取って面倒を見たりと、ある意味自立した健全な社会・コミュニティが日本以上に残っているのではないかと感じます。

自立の真の意味とは何か、そう自分に問い続けながら、これからの仕事にまい進します。



パプアニューギニアの第2の都市レイの空港建設予定地を視察する堀越さん